

7歳で突然、放り込まれた英語のプール

私が英語と出会ったのは7歳のとき。商社に勤める父の仕事の関係で、家族でニューヨークに渡りました。第二次世界大戦終結から10年後で、日本人というだけで差別的に呼ばれることもありましたが、私は子供でしたから、あまり気にしていませんでしたね。

初めは英語などまったく分からない状態でした。英語を母語としない子供のためのESL (English as a Second Language) などありません。突然プールへ放り込まれ、「みんなと一緒にいたいなら泳ぐしかない」と言われるようなもので、誰かが手を差し伸べてくれることなどない、そんな状況でした。しかし、小学1年生だったことが幸いして、みんなで一緒にABCから学び始められました。そして、友達と遊ぶうちに英語で話せるようになっていったのです。

帰国するも、今度は日本語がまったく分からない!

2年生が終わる頃には、カナダのモントリオールへ。ここでは子供の能力に応じて、留年や飛び級もありました。カトリック系の小学校だったので、時にはシスターが音楽の授業をしたり、プロのフットボール選手が体育の授業をしてくれたりすることもありました。地域のスポーツクラブも盛んで、週末には野球やアイスホッケーなど、シーズンごとに違うスポーツをしていましたね。

しかし、中学1年生の途中で帰国。今度は日本語が分からないまま、京都のカトリック系中高一貫校に飛び込みました。カナダでは、両親は私に日本語を強制せず、妹とは英語で会話をしていましたので、日本語を覚えるのには相当な時間がかかりました。自分の名前さえ書けず、ひらが

なも分からない。授業は何も理解できず、2年生の1年間、成績は常に学年の下から2番目。それでも次第に日常会話を理解し、ある程度の日本語は読めるようになりました。

英語教育の道へ導いたスピーチ指導

高校生になると、チャール杯争奪全日本高等学校生英語弁論大会で優勝。翌年からは、「帰国生徒」の参加は認められなくなったので、私は後輩のスピーチの構成を考えて原稿を起こし、読み方から発音まで全てを指導しました。すると、その後輩が全国大会で準優勝したのです。英語の先生から「よしけんがいなければ、この表彰はなかった」と全校生徒の前で褒められ、そのことは大きな自信になりました。自分がスポットライトを浴びるよりも、仲間が輝くことがうれしかったのを覚えています。この経験が、私を英語教育の道へと導いたのです。

言語の本質や構造を理解したい

英語の教師になりたい。その思いを神父様に話すと、言語学を学ぶよう勧められました。その頃、国語の教科書で『国語学原論』を記した時枝誠記先生の理論を抜粋した内容を読んで面白かったこともあり、言語の本質や構造を科学的に研究することに興味を湧きました。

例えば、「本」という言葉自体は何も動きを持ちませんが、「本が」「本に」と助詞を付けることで、「本」という言葉にプロセスを与えます。助詞は風呂敷のようなもので、言葉を包み込んで持ったときに初めて言葉を動かせるという「言語過程説」に、わくわくしました。

子供たちに学びの楽しさを教えたい

しかし、上智大学に進むと当時は学園紛争の真っただ中。まともに授業を受けられる状況ではなく、学生寮の仲

間と自主勉強会をしていました。その後、紛争が下火になると、授業だけでは飽き足らず、言語学サークルを作って仲間たちと学び合い、学園祭で研究発表をしたものです。

小中学生に英語を学ぶ楽しさを教える、STP (Summer Teaching Program) というボランティア活動もしました。活動のために夏休みに鈍行列車に揺られて23時間もかけて下関へ向かい、教会や学校を借りて寝泊まりし、自炊をして、銭湯に入って…。好きだからこそ続けられた。メンバーも同じ気持ちでした。そんなメンバーたちは英語の先生となり、全国で教育に携ってきました。STPは50年経った今でも、国内6カ所とカンボジアで活動をしています。

好きだから、やりたいから続けてこられた

私は英語教師を育てる道を選びました。そして、ミシガン大学大学院の博士課程を修了したのち、上智大学に戻り、英語学科卒業生のための研究会ASTE (Association of Sophian Teachers of English) を設立しました。現在では、他学科の卒業生や他大学出身者も参加できる研究会として活動を続けています。

振り返れば、どの活動も自分が好きでしてきたことばかりです。そして、いつもそばには、そんな自分を後押ししてくれる恩師がいました。だからこそ、私も後輩にも同じようにしたい。教師とはそういうものだと思います。

先生自身が「英語が好きな気持ち」を大切に

先生方には、「なぜ、自分は教員になったのか」という初心に立ち返り、「英語が好きな気持ち」を子供たちに伝えてほしいと思います。

不安があるのは当たり前です。一人で悩まず、たくさんの人と話したり、研究会や講演会に参加したり、書物を読んだりすればいいのです。そのなかで自分なりに気づき、動き出すきっかけをもらえるはずです。ASTEもまさに、そのようなことから始まりました。参加者同士が「自分はこんなことを悩んでいる」「うちの学校はこうしている」と課題をシェアし、アイデアを出し合い、解決していく場です。一緒に考える仲間がいることが支えになるものです。ほかの誰でもない、自分がやりたいと決めたことを、自信を持って進んでいってください。



私と英語

Special Message

上智大学
言語教育研究センター長、特別招聘教授

吉田 研作

上智大学言語教育研究センター長、特別招聘教授。上智大学大学院言語学専攻修士課程修了。ミシガン大学大学院博士課程修了。英語教育、バイリンガリズム、異文化間コミュニケーション教育の第一人者。文部科学省の外国語教育に関する各委員会などにも携わり、英語が使える日本人の育成に関する研究、活動を行っている。